題名	チンパンジーー人と動物を結ぶ生きたかけ橋
Title	The Chimpanzee—a Living Bridge Between Man and Beast
著者名	ジェーン・グドール
Author(s)	Jane Goodall
言語 Language	日本語·英語 Japanese, English
書名	稲盛財団:京都賞と助成金
Book title	The Inamori Foundation: Kyoto Prizes & Inamori Grants
受賞回	6
受賞年度	1990
出版者	財団法人 稲盛財団
Publisher	The Inamori Foundation
発行日 Issue Date	10/31/1992
開始ページ Start page	118
終了ページ End page	140
ISBN	978-4-900663-06-9

チンパンジーー人と動物を結ぶ生きたかけ橋 ジェーン・グドール

たいへん多くの方々に先んじてこの私が京都賞を賜りますことは、いまだに信じられない ような気がいたします。このうえない栄誉に存じます。私に申せますことは、この素晴らし い幸運を最大限に活かしてゆくことをかたく誓うことしかありません。なぜなら、京都賞を 受賞することは、世界中で私の信用が増すという栄誉なのです。そして、京都賞の極めて多 額の副賞によって、いままでは私にできなかったことができるようになるからです。

まず、私の日本における同業の研究者の皆さんが研究を通じて、猿や類人猿をより深く理 解するためにしてこられた大きな貢献を賛えることから、始めたいと思います。日本の研究 者たちは、ヒトをのぞく霊長類を本格的に研究対象とし、そこから学ぼうという姿勢をとっ たさきがけとなりました。この国にいるニホンザルの研究を1948年に始められた今西(錦司) 先生こそ、霊長類学の父と考えられます。そして、最初の直弟子であった川村(俊蔵)先生、 伊谷(純一郎)先生、河合(雅雄)先生を通じて、今西先生は日本の霊長類学の一大学派を 生みだされました。今西先生と伊谷先生は、1961年にタンザニアのチンパンジーの行動研究 を開始され、1965年からは西田(利貞)先生が、私の調査地でありますゴンベからほんの140 キロのところにありますマハレ山塊に調査基地を置かれています。マハレとゴンベでの二つ の研究こそ、ほかに類を見ないチンパンジーの長期的研究の双璧をなしています。そしてさ らに、杉山(幸丸)先生をはじめ、ほかの日本の霊長類学者によってアフリカのほかの地域 においてもチンパンジーが観察され、またその保護のための努力の一翼が担われています。 私は、こうした霊長類学の日本の研究者仲間と、この京都賞受賞の栄誉をわかち合いたいと 思います。

「30年前、いったいどうしてチンパンジーの研究をすることになったのですか」と私はよく 尋ねられます。私が幼い頃、夢が二つありました。ひとつは、動物に囲まれて暮らし、動物 のすべてを学ぶことでした。とりわけアフリカの動物たちに惹かれていたのです。もうひと つの夢は、そうした動物たちの本を書くことでした。私はなんと恵まれていたのでしょう。 大人になってから人生の折り返し点で、幼いときの夢がかなったと認識して背筋を伸ばすこ とのできる人は、そんなに数多くはいないでしょう。そして恵まれていたといえば、私の母 は本当に素敵な人で、私が望んですることをいつも見守ってくれました。「ジェーンはお馬鹿 さんね、女の子はそんなことをしないものよ」などと母から言われたことは一度もありませ ん。当時、私のしたことは女の子のしないことばかりだったのですが、「もし本当にあなたの やりたいことがそれなら、一生懸命に何でもやって、チャンスを逃さないで頑張れば、きっ とアフリカにだって行けるわ」と母は言ってくれました。

私の夢は、学校の友達で両親といっしょにアフリカに引っ越した人からの手紙が届いたと きから、実現に向かって動きだしたのです。「遊びに来たら」という手紙を読んだ私は、ロン

THE CHIMPANZEE—A LIVING BRIDGE BETWEEN MAN AND BEAST Jane Goodall

It is still hard for me to believe that, from among so many, I have been selected as a Kyoto Prize laureate. It is such a great honor. All I can say is that I am utterly committed to making the very best possible use of this great opportunity. For this is an honor that will increase my credibility around the world;and, with its extraordinarily generous financial gift, make it possible for me to do things that I could not have done before.

I want to start by paying tribute to the tremendous contribution that my colleagues in Japan have made to our understanding of monkeys and apes. Japanese scientists were the very first to make a real commitment to studying and learning from non-human primates. Dr. Imanishi, who began studies of your Japanese monkeys in 1948, may truly be considered the Father of Primatology. And, through his first students, Dr. Itani and Dr. Kawai, he founded the great school of Japanese primatology. Dr. Imanishi and Dr. Itani intiated research into chimpanzee behavior in Tanzania in 1961 and since 1965, Dr. Nishida has maintained a research center in the Mahale Mountains, just 100 miles from my own study site at Gombe. These two efforts, Mahale and Gombe, stand as the longest studies of chimpanzee groups anywhere. And other Japanese primatologists—such as Dr. Sugiyama—are observing and helping to conserve chimpanzees in many other parts of Africa. I want to share the honor of this prize with all of them.

People often ask how it all began for me — why did I start my study of chimpanzees 30 years ago? When I was a child I had two dreams: I wanted to live among and learn about animals, especially animals in Africa, and I wanted to write books about them. How fortunate I have been. There are not too many people who can stand up, halfway through their adult life, knowing that their childhood dreams have been realized. And how lucky I was, too, in having a truly wonderful and supportive mother. She never said to me: "Jane, you are stupid. Girls don't do things like that" (although, of course, in those days, girls didn't!). But she used to say: "If that's what you really want, then, if you work hard enough and take advantage of opportunities, you'll get to Africa in the end."

My dream began to come true when I had a letter from a school friend whose parents had moved to Kenya. Why didn't I go for a visit, she asked. Without a moment's hesitation I gave up my wonderful but very poorly paid job at a documentary film studio in London, went home and worked as a waitress, saving up my wages and my tips, until, at last, I was able to buy a return ticket on a boat to Africa. ドンでのおもしろいけれども収入の少ないドキュメンタリー映画のスタジオの仕事をきっぱ りとやめて実家に帰り、ウエートレスとして働いて給料とチップを貯金しました。とうとう アフリカへゆく往復の船の切符を買って旅立つことができたのです。

アフリカに着いてしばらくすると、「そんなに動物に興味があるのならリーキーに会うのが 一番だ」と誰かが言ってくれました。それは、今は亡きルイス・リーキー先生のことで、有 名な古生物学者でした。私は、すぐにその人に面会を申し入れました。リーキー先生は、私 に様々な動物についていろいろ難しい質問をしました。それから何回か私を国立公園に連れ ていってくれました。そして私を自然史博物館で助手として雇ってくれたのです。長い話を かいつまんで言えば、私がゴンベでチンパンジーの研究を始められるだけの資金を工面して くれたのでした。

それから30年間、私は人間と同じように魅力にあふれ、ほとんどそれに劣らず複雑なチン パンジーたちと共に暮らし、学んでくることができました。チンパンジーを、私が、そして 日本の研究者仲間がこうして研究し続けているのは、チンパンジーがたいへん魅力的で、し かも私達に最も近い親戚だという理由からです。まだまだ学ぶことは山ほどあります。ゴン べでは、30年たった今もなお、新たな行動が観察されています。それは25年の歴史をもつマ ハレでも同じことなのです。

まず私がゴンベで過ごした30年間を振り返る短い旅にご一緒いただきましょう。長年のあ いだに知り合った生命力にあふれた個性的なチンパンジーのうちから何頭かを、紹介したい と思います。と申しますのは、ちょうど人間が一人一人個性をもっているように、チンパン ジーも一頭一頭個性をもっているからです。そして、それぞれのチンパンジーが独自の履歴 をたどるのです。

私が初めてゴンベに着いたとき、最大の問題はチンパンジーが人間を怖がることでした。 私が500メートル離れていても、私の姿を見るとチンパンジーは逃げてしまいます。それでも だんだんと、いつも同じ色の服を着るように心がけ、あまり性急に近づかないようにしてい るうちに、チンパンジーにもこのおかしな白い肌の猿はどうやら恐ろしい生き物ではないと わかったようでした。私を受け入れて、しまいには絶対的に信用してくれたのです。

このような当初の何か月かの困難な時期でも、素晴らしい森がいつもそこにあって、見る もの、学ぶものには、こと欠かなかったわけです。しかも世界中で自分が一番いたい場所に いたのです。そして自然とひとつになるということから得られる大いなるやすらぎを私は発 見しました。私が森の中で、ひとりでいると、ちょうど日本の美しいお寺に静かにいるとき とよく似た、静寂の感覚と命をあるがままに受け入れる姿勢をもつことができるのです。

私のことを最初に信用してくれたのは、白い髭のあるデイヴィッド・グレイビアドでした。

After I had been there a short while someone said, "If you're interested in animals you should meet Leakey." That was the late Louis Leakey, the well known paleontologist. I made an appointment to see him instantly. He asked all manner of difficult questions about all manner of different animals. He took me out a few times into the national park. And then he offered me a job as his assistant at the natural history museum. And eventually, to cut a long story short, he managed to find enough money for me to begin the study of the chimpanzees of Gombe.

And so I have been priveledged to spend 30 years living among and learning about animals who are just as fascinating and almost as complex as human beings. It is because chimpanzees are so fascinating, and because they are our closest living relatives that I, and my Japanese colleagues, are still studying them. And we still have a great deal to learn. Even after 30 years we continue to observe new behaviors at Gombe, and it is the same, after 25 years, at Mahale.

Let me start by taking you with me on a short journey through my 30 years at Gombe and introduce you to just a few of the vivid and unique chimpanzee personalities I have known over the years. Because, just like each human, each chimpanzee is very much an individual. And each one has his or her own unique life history.

When I first got to Gombe my main difficulty was that the chimpanzees were so shy. Even if I was 500 meters away they ran off when they saw me. But gradually, because I wore the same colored clothes, and didn't try to get too close too quickly they realized that the peculiar white-skinned ape was not, after all, so frightening. They came to accept me and, in the end, to trust me absolutely.

And even during those first difficult months, there was always the wonder of the forest. There was so much to see and learn about. I was where I wanted to be most of all in the world. And I discovered the great peace that comes from unity with nature. When I am alone in the forest I have similar feelings of tranquility and acceptance of life as when I am quiet in one of your beautiful temples.

The first chimpanzee who came to trust me was David Greybeard. A very special chimpanzee. He was calm and gentle. I shall never forget the day when, for the very first time, he took a banana from my hand. He helped to open the door for me into the chimpanzees' world—because the others noticed his lack of fear and became less fearful themselves.

Chimpanzees live in a male-dominated society. In the early 60s Goliath, David Greybeard's close companion, was top-ranking male. He maintained his position

とびきり素敵なチンパンジーで、落ち着いていてやさしい雄でした。初めて白髭のデイヴィ ッドが私の手からバナナをとった日のことは、けっして忘れません。デイヴィッドが私にか わって、チンパンジーの世界への扉を開いてくれたのです。なぜなら、ほかのチンパンジー はデイヴィッドが私を恐れない様子を見て、自分たちも私をこわがらなくなっていったから です。

チンパンジーの社会は雄が支配する社会です。1960年代の初めは、ゴライアスというデイ ヴィッドの親友がトップの座をしめる雄でした。ゴライアスがトップの座にあったのは、ま ず勇敢な性格だったことと、派手な突撃誇示行動ができたからです。突撃誇示行動の最中、 雄は地面をかけまわり、脚で物をけったり、じだんだを踏んだり、石を投げたり、枝をひき ずったりします。飛び上がって草木をゆらし、恐ろしいすごみ顔をしてみせます。言い換え るなら、雄は自分をより大きく見せ、実際よりもはるかに恐ろしげにふるまって、現実に闘 うことなくライバルたちを威圧してしまうことがよくあるのです。

1964年にゴライアスはマイクに造反されました。マイクはその年の初めには順位の低い雄 で、体格はゴライアスに似て小さいほうでした。けれどもマイクは、社会的な順位を上げよ うとする意欲にたいへん燃えていました。マイクがゴライアスから一位雄の座を奪ったのは、 とても劇的でした。マイクは突撃誇示のたびに、私のキャンプから運んできた空の灯油カン を使うようになりました。やがて3個もの空きカンを次々と前方へ蹴ったりたたいたりしな がら走り続けることを覚えたのです。こうしたパフォーマンスは、当時、マイクより順位の 高かったほかの多くの雄たちに、たいへん恐ろしがられました。マイクがカンをたたきなが ら走ってくると、雄たちはたいてい、まずは逃げ、それから敬意を表してマイクのまわりに 集まりました。4か月のうちに、マイクは目標を達成して、新しいトップの座に着きました。 トップの座についた雄をアルファ雄と呼びますが、アルファの座をめぐって雄の順位が逆転 したのです。

マイクは6年間、アルファ雄として君臨しましたが、6年が終わる頃にはふけて見えまし た。そしてマイクは、ずっと若く体重も重そうで、はるかに攻撃的なハンフリーにたった一 度の闘いで敗れてしまいました。ところがハンフリーは、トップの座を保ってゆくには、賢 さも社交的な技量も欠いていました。1年後にハンフリーは利口なフィガンに敗れました。 フィガンは、マイクやゴライアスと同じく小柄なチンパンジーでしたが、やはりマイクと同 様に、利口で、意欲的で、社交的な技量もあったのでトップの座につけたのです。フィガン は兄にあたるフェイブンとの間に培った緊密な相互支援の絆を、うまく活用しました。フェ イブンは、ポリオが流行したとき罹患したために片腕が不自由でしたが、それにもかかわら ず、迫力のある直立姿勢での示威行動を覚えました。フィガンは、フェイブンが近くにいな partly because of his courageous disposition, and partly by means of his spectacular charging display. During such a performance the male runs across the ground, slapping and stamping with his feet, hurling rocks and dragging branches. He leaps up to sway the vegetation, a ferocious scowl on his face. In other words he makes himself look larger and more dangerous than he may really be and can often intimidate his rivals without having to risk an actual fight.

In 1964 Goliath was challenged by Mike. Mike was a low-ranking male at the start of the year and, like Goliath, small in stature. But he was very highly motivated to better his social position. The way he deposed Goliath was dramatic. He began to use empty kerosene cans from my camp in his charging displays. He actually learned to keep as many as three ahead of him, kicking and hitting them as he ran. These performances were very intimidating to the other males, almost all of whom, at that time, were higher ranking than Mike. When he charged towards them they usually fled—then gathered around him to pay their respects. Within four months he had attained his goal and become the new top-ranked or alpha male of his community.

Mike reigned for six years. At the end of this time he was looking old. He was defeated by a much younger, heavier and more aggressive male, Humphrey, during a single fight. But Humphrey lacked the intelligence, the social skills, to maintain his position for long. One and a half years later he was defeated by the highly intelligent Figan.

Figan, like Mike and Goliath before him, was a small chimpanzee. And he, like Mike, got to the top because he was intelligent, highly motivated, and very socially skillful. Figan made use of the close supportive relationship that he developed with his elder brother. Faben, crippled during an epidemic of polio, nevertheless learned to perform spectacular upright displays. And Figan almost never challenged the bigger Humphrey unless Faben was nearby. Then the brothers would display as a team—and, as the months went by, Humphrey became increasingly tense and nervous and Figan increasingly self-confident. Until, in 1973, Figan defeated Humphrey in a surprise attack and took over the coveted alpha position—a position that he retained for 10 years.

Why is it that some males exert so much energy into bettering and maintaining their position in the hierarchy while others—like Jomeo here, the heaviest individual we have known at Gombe—seem quite uninterested in such matters? Part of the answer must lie in their genetic inheritance. But, without doubt, part lies also in the kind of mothering they receive, their position in the family, the sex いかぎりは、体の大きなハンフリーに、挑戦しようとはしませんでした。そして兄弟はチームを組んで示威を行い、月日がたつにつれてハンフリーは緊張して神経質になってゆき、フィガンはますます自信たっぷりになりました。そうこうして1973年にフィガンはハンフリーを不意打ちにかけ、念願のアルファ雄の座についたのです。以後10年間、フィガンはアルファ雄でした。

いったいどうして、雄によっては社会的順位構造の中の自分の地位を高めたり、保とうと して多大なエネルギーを費やすものがある一方、ジョメオのようにゴンベきっての体格の大 きい雄にもかかわらず、まったくこうしたことがらに関心を示さないかのようにふるまうも のがいるのでしょうか。何割かはそれぞれの遺伝的特質によるのでしょう。しかし、残りの 何割かは、それぞれの母親による育てられ方、家族構成、年長の兄弟がいる場合はその性別、 そしてそのほかの幼年時代の経験にもまたその答えがひそんでいるにちがいありません。フ ィガンの母親フローは、1960年代初頭に私が知り合ったときにはすでに年老いていました。 フローは子供をよくかばう母親であり、攻撃的で、ものおじせず、雌の中では順位はトップ でした。フィガンは、このフローの二番目の息子で、子供時代のいさかいのすべてに母親と 兄のうしろだてを得ることができました。こうしてフィガンは一生の早い時期に、順位の高 いものに特有の自信というものを身につけたのでした。

フィフィはフローの三番目の子供で、母親ばかりでなく、しばしばどちらの兄か両方の兄 たちに助けられて育ちました。フィガンと同じように、フィフィも順位の高い、ものおじし ない雌になりました。フィフィの初めての子、フロイドはフィフィが13歳になった1971年に 生まれました。おばあさんにあたるフローは、まだ生存していて、フィフィはその頃もまだ 長い時間をフローのかたわらで過ごしていました。

フロイドが2歳のとき、おばあさんのフローが死にました。フィフィの弟のフリントは、年 老いた母親に異常なほど頼りきっていました。それというのも、母親のフローが年とって弱 り、ちゃんと乳離れさせてやれなかったのが主な原因でした。8歳になってもフリントは、 まだ夜は母親のベッドで寝て、おんぶをねだったりしていました。そのためフローが死ぬと、 フリントは母親なしでは生きてゆけないというふうに見えました。フリントはふさぎこみ、 ものを食べようとせず、ほかのチンパンジーたちを避けました。このような悲しみの状態の うちに、体全体の免疫が弱ったのでしょうか、フリントは病気になって死んでしまいました。 母親が死んでから、ほんの数週間のことでした。

一方、フィフィはますます強くなっていきました。母親のフローがそうであったように、 フィフィは手際がよく、抱擁力もあり、しんぼう強く愛情の深い母親になったのでした。フ ロイドは大柄で健康な子で、ちょうど5歳で乳離れすると、弟のフロドが生まれました。フ of their elder siblings (if they have any), and other kinds of early experience. Figan's mother, Flo, was already elderly when first I knew her in the early 60s. She was a protective mother, and an aggressive and asertive female, top in the female hierarchy. Figan was her second son, backed and supported by both his mother and elder brother during all his childhood squabbles. Thus, he acquired early the kind of self-confidence that we have come to associate with high rank.

Fifi, Flo's third offspring, was supported not only by her mother, but often by one or the other of her big brothers also. And, like Figan, she grew up to become a high-ranking and assertive female. Her first child, Freud, was born, when she was about 13 years old in 1971. His grandmother was still alive, and Fifi still spent most of her time with old Flo.

When Freud was two years old, Flo died. Fifi's young brother, Flint, had developed an abnormal dependency on his ancient mother—mainly because she had been too old to wean him properly. Even at eight years old he was still sharing her nest at night, still trying to ride her back. And so, when she died, Flint, it seemed, was unable to survive without her. He became very depressed. He refused most food and avoided other chimpanzees. In this state of grieving, his immune system weakened, he fell sick and died—just a few weeks after the death of his mother.

Fifi, however, went from strength to strength. Like Flo before her, Fifi was an efficient, protective, tolerant and affectionate mother. Freud developed into a large and healthy child. When he was just five years old, and weaned, his young brother, Frodo was born. Freud was fascinated by the infant and, as soon as Fifi permited, spent much time grooming, playing with and carrying his little brother. And Frodo, for his part, developed precociously—for he was always watching and imitating his elder sibling. When Frodo was five years old, Fifi, like clockwork, gave birth again, this time to daughter Fanni. And Frodo delighted in playing with and carrying his small sister. So did Freud even though, by this time, he was ten years old and spending a good deal of time away from his family, traveling with the adult males. And so the friendly, supportive bonds between the family members were continually strengthened.

Today Fifi has five offspring. Fanni has a young sister, Flossi. And the baby of the family is little Faustino.

Fifi is an unusually successful mother. She has lost none of her infants to date, and three of her offspring are reproductively mature. She should become a grandmother any day now. Yet she is only about 32 years old, she could give birth

ロイドはこの赤ちゃんに夢中になり、母親が許すようになると、毛をつくろったり、遊んで やったり、運んでやったりして、過ごしました。フロドはといえば、いつもお兄さんを見て まねをしていたので、おませに育ちました。フロドが5歳のとき、フィフィは時計じかけの ようにまた出産して、今度は娘のファニイが生まれました。するとフロドは喜んで妹と遊ん だり、妹を運んでやったりしたのです。この頃までにはもう10歳になっていたフロイドも、 ほかの雄と行動して長いあいだ家族から離れていたにもかかわらず、妹のめんどうを見まし た。こうして、家族同士の親密でたがいに支え合う絆は、たえず強化されてゆきました。

今日、フィフィは5頭のチンパンジーの母親となり、ファニイの下には妹のフロシがいて、 赤ん坊のファウスティノが最年少です。

フィフィは雌の中でも、とりわけうまくいった母親といえます。現在、子供は全員生存し ていて、そのうち3頭は性的に成熟しています。もういつおばあさんになっても、おかしく ありません。そのくせ32歳くらいにしかなっていませんから、チンパンジーとしての余命15 年ほどの間に、まだ2回は出産できるかもしれません。

多くの雌たちにとっては、出産と子育てはそんなにうまくはいきません。例えばこのパラ ス。素敵な、気のつく、遊ばせ上手な母親でした。ところがとても不幸でした。はじめての 子が3歳のとき、病気で死んでしまいました。ほどなくしてパラスは、母親をなくしたスコ ーシャという5歳の雌の世話をし始めたのです。スコーシャの母親はパラスの姉か妹だった のかもしれません。だとすればパラスはスコーシャの実のおばさんにあたるわけです。

スコーシャを養子にしてからしばらくたって、パラスは出産しました。ところが数週間で この赤ん坊は姿が見えなくなりました。何がおこったのかは、わかりません。それから1年 ほどしてパラスはふたたび出産して、私達はかわいらしい赤ん坊をクリスタルと名づけまし た。この経過を知らない人が見たら、誰でもこれは普通の家族で、母親と親離れしていない 姉妹と思ったことでしょう。スコーシャは、本当の家族のようになじんでいました。

クリスタルが5歳のとき、つまりスコーシャが母親をなくしたのと同じ年頃に、パラスが 病気で死んでしまいました。スコーシャは、そのとき11歳で、幼いクリスタルを世話しよう としました。見ていて胸がいたみました。それでもスコーシャは、まだ未熟で自分自身がま だ精神的に不安定で、母親をなくしたクリスタルに必要なやすらぎを与えてやれなかったよ うでした。孤児の姉妹はいっしょにさすらい、何週間かたつうちにクリスタルはだんだん生 気を失って、ついに母親の死から6か月ほどで病気になり、やはり死んでしまいました。こ うしてパラスの血筋は絶えてしまったのです。

いつも私は母子の関係に最も心を奪われてきました。野生であるか飼育下にあるかを問わ ず私がチンパンジーから学び確信するに至ったことに、幼少の経験、とりわけ母親の個性と to two more infants during the 15 or so years left to her.

Most females have a much less spectacular reproductive career. This is Pallas. She was a wonderful, attentive, and playful mother. But she had terribly bad luck. Her first child got sick and died when he was three years old. Soon after that she adopted a five-year-old female, Skosha, whose mother had died. Skosha's mother was probably Pallas's sister—if so, Pallas was Skosha's biological aunt.

Soon after adopting Skosha, Pallas gave birth. But the baby vanished when he was just a few weeks old. We do not know what happened to him. After about a year Pallas gave birth again, to an enchanting infant whom we named Kristal. Anyone who did not know the facts would have thought that this was a normal family—a mother with two dependent offspring. Skosha was just like one of the family.

And then, when Kristal was five years old—the age Skosha was when she lost her mother—Pallas became very sick and died. And it was touching to see how Skosha, eleven years old, tried to look after little Kristal. But it seemed that she was too immature, too unsure of herself, to provide Kristal with the security she had lost when her mother died. The two orphans wandered about together and, as the weeks went by, Kristal became increasingly lethargic and eventually, about six months after her mother's death, Kristal got sick and died also. And so Pallas left no youngsters to carry on her line.

I have always been most fascinated by the mother - child relationship. What I have learned from the chimpanzees, both in the wild and in captivity, has convinced me that the nature of early experience, in particularly the personality and child raising techniques of the mother, are of crucial importance in the development of adult personality and behavior. And I firmly believe this is equally true, if not more so, for our own children.

When my son was born in 1967 I felt that it was very important that I spend a great deal of time with him. And I had watched the great enjoyment that chimpanzee mothers get from interacting with their infants, and I wanted to enjoy being with my son in the same way. And so, although I continued to live at Gombe, and direct the research, I more or less stopped my own studies during the first five years of his life. I have never regretted that decision.

It is impossible to spend much time with chimpanzees without being struck by the many ways in which their behavior resembles ours.

The long period of childhood dependency on the mother is important for chimpanzees, as it is for humans, as a time for learning. Close, affectionate, 子育ての上手下手こそ、おとなになったときの性格形成と行動に大きな影響を及ぼすという ことがあります。このことは、私達の子供たちにとっても、やはり同じように、あるいはそ れ以上に、あてはまるのだと固く信じるようになりました。

私に1967年、息子が生まれたとき、息子のそばになるべく長くいてやることがとても大切 に思えました。私はチンパンジーの母親たちが子供に接して得ている大きな喜びを観察して 知っていましたから、私も息子といっしょにいる時間を生かしたいと思いました。そういう わけで、ゴンベに住み続け、研究の指揮はとり続けたものの、息子が5歳になるまでは、私 は、研究を中断しました。この決断を今まで後悔したことは一度もありません。

チンパンジーと長い間過ごしてみて、その行動が私達の行動にいろいろとよく似ているこ とに驚かないわけにはいきません。

母親に頼りっぱなしの長い子供時代は、人間と同じように、チンパンジーにとっても学習 の時期として重要です。チンパンジーの家族の中で、そして時には血のつながらないものど うしの間でさえ、親密で愛情に満ちた、たがいに支え合う絆が培われ、それはときには生涯 にわたって続きます。

チンパンジーとヒトでは、言語によらないコミュニケーションの様式が実によく似ていま す。どちらの種にとっても、親しげなスキンキップが社会的な和を保つうえで重要な役割を はたします。このことは子供時代にけがをしたり、怖がったりする子供のそばで、母親がな だめてやり、不安をとりのぞいてやれる毎日の中から生まれてくるにちがいありません。子 供が親離れするにしたがって、今度はその子供は、自分の社会の中の親しい他人に、同じよ うなやさしさを求めるようになるのです。チンパンジーは人間と同じように、キスをしたり 手をつないだり、たがいに抱き合います。私達も、やはりよく似た状況のもとで、こうした しぐさを繰り返します。

2頭のチンパンジーが、思いがけない食べ物を発見すると、興奮し、キスをして腕をひろ げて抱き合います。

おびえた雌が、おとなの雄の体にふれて、大丈夫だと自分にいいきかせます。

再会したものどうし、キスをします。狩りがうまくいったあとで、獲物をせしめたものが、 まわりに寄ってきて肉をねだって手をさしだすものに、肉を分け与えることもあるのです。 ついでにいうと、チンパンジーは狩猟などで、かなり複雑な行動上の協力を見せます。

チンパンジー社会における威嚇のしぐさは、私達のそれと似かよっています。腕をふりま わしたり、二本足で立って肩をいからせて歩きまわります。おとなの雄は、ときには自分よ り弱いものを攻撃することもありますが、こうした攻撃はたいていほんの一瞬のことで、あ とで弱いほうが近寄って従属の意をしめす前かがみの姿勢をすれば、雌であれ雄であれ、たい supportive bonds are formed between members of a chimpanzee family, and sometimes between non-related individuals, that may persist throughout life.

There are striking similarities in the non-verbal communication patterns of chimpanzees and humans. In both our species friendly physical contact plays an important role in maintaining social harmony. And this almost certainly stems from the long years of childhood when the mother is always close by to calm and reassure her hurt or frightened child. And as he spends longer away from her, he seeks the same kind of reassurance from other familiar members of his community. Chimpanzees, like humans, kiss, hold hands, embrace one another. And we perform these actions in very similar contexts.

Two chimpanzees, suddenly excited as they see unexpected food, kiss and fling their arms around each other.

A frightened female seeks reassurance from contact with an adult male.

Reuniting after a separation, two chimpanzees may kiss. And after a successful hunt (when, incidentally, chimpanzees may show quite sophisticated cooperation) the possessor of meat may share his prey with those who, with outstretched hands, cluster around to beg.

Threatening gestures in chimpanzee society may look much like some of ours. The waving of arms, the bipedal swagger. Adult males do sometimes attack their subordinates, but these attacks are usually brief, and afterwards, when the victim approaches and crouches in submission, the aggressor usually reassures him (or her) with gentle patting on the back, or an embrace or kiss. And so, for the most part, relationships between community members are relaxed and friendly.

Not so when it comes to interactions between neighboring communities. We now know that chimpanzees can be brutal in their treatment of strangers. The adult males regularly patrol the boundaries of their territory. They move silently and cautiously, keeping close together. If they spy a member of the neighboring community they may give chase, particularly if the victim is a fully adult female. And if they catch her they may perpetrate gang attacks, five or more males attacking all together or one after another. These assaults result in severe wounding and this may lead to death. Like humans, chimpanzees have a dark side to their natures. Indeed, during one four-year period the males of our main study group waged a primitive war against individuals of a small neighboring community, attacking them one by one until none were left. And what of chimpanzees' emotions? Almost everyone who has worked closely with these apes is convinced that they share with us feelings that are similar to those that we describe as

てい強いほうは、その背中をやさしくたたいたり、抱きかかえたり、キスをしたりして安心 してよいことを伝えます。そのように、一般に同じ単位集団のものどうしの関係は親しげで、 くつろいでいます。

しかし隣接する単位集団間の接し方となると話は別です。よそものを扱うときチンパンジ ーがかなり暴力的になりうることは、もうわかっています。おとなの雄はなわばりの境界を 定期的にパトロールします。音をたてずに警戒した様子で、たがいに身を寄せ合って行動し ます。もしも隣の単位集団のチンパンジーの姿を見つけたら、特にそれがおとなの雌だった 場合、全員で追跡します。追いつめて皆で袋だたきにします。5、6 頭の雄がいっせいに、 あるいは順々に攻撃するのです。このようにして攻撃されると深い傷を負ったり、またその 傷がもとで死んでしまうこともあります。人間と同じように、チンパンジーにも暗黒の側面 があるのです。事実、あるとき4年間にわたって、私の主な研究対象であった単位集団のチ ンパンジーの雄たちが、隣の小さな単位集団のチンパンジーに原始的な戦争をしかけ、1 頭 ずつ殺してついに全滅させてしまいました。

ところでチンパンジーの感情はどうでしょう。チンパンジーと間近に接した人はほとんど 例外なく、チンパンジーも人間が幸せとか満足とか悲しみとか絶望と呼ぶ感情を味わってい ると確信しています。

またチンパンジーは 私達が人間にしかないと思いこんでいたような様々の知的能力を披 露してくれます。ものごとを考えたり、単純な問題を解くことができますし、野生のチンパ ンジーは、私達人間をのぞけばほかの動物と比較して、多くの目的のためにより多くのもの を道具として使うことができます。ゴンベで最も頻繁に使われる道具は、シロアリを釣りあ げる小枝や草の茎などです。また、あらゆる用途に応じて、棒切れ、木の葉、石ころなども 使われることがあるのです。重要な発見としては、アフリカの各地のチンパンジーが異なっ た文化的習慣をもっているということがあげられます。例えば、マハレのチンパンジーは 1965年から西田先生たちの調査隊が研究していますが、オオアリを小枝で釣りあげて食べる のにかなりの時間を費やします。ゴンベにもこのアリはたくさんいますが、ここのチンパン ジーは食べません。ゴンベのチンパンジーがよく食べるのは、どう猛で人を咬むサファリア リで、皮をむいた長い小枝を使って、ほんとうにおいしそうに食べるのです。一方、マハレ ではこのアリには見向きもしません。また西アフリカでの研究では、堅い殻をもった木の実 をチンパンジーが金床と金棺を使う要領でたたき割るのが観察されています。これと同じこ とが、東京の多摩動物公園のチンパンジーでも見られるのです。若いチンパンジーは、その 集団のこうした様々な習慣を、ちょうど人間の子供たちと同じように、見て覚え、見よう見 まねで練習して学んでゆくのです。

happiness or contentment, sorrow and despair.

Finally, chimpanzees show many intellectual abilities that we used to believe were unique to man. They can reason, and solve simple problems. Wild chimpanzees use more objects as tools, for more purposes, than any other creature except ourselves. The tools used most often at Gombe are twigs or grass stems for capturing termites (white ants). They also use sticks, leaves, and rocks for various purposes, even as weapons. A very significant discovery is that chimpanzees in different parts of Africa show different cultural traditions. For example, the chimpanzees at Mahale, studied since 1966 by Dr. Nishida and his team, spend much time fishing for carpenter ants with twigs. There are many of these ants at Gombe, but the chimpanzees do not eat them. But the Gombe chimpanzees regularly feast on the vicious biting driver ants, using long, peeled sticks. These ants are ignored at Mahale. And in West Africa some of the chimpanzee populations studied use a hammer and anvil technique to crack open hard shelled nuts. You can see these skills demonstrated by the wonderful chimpanzee group at your Tama Zoo in Tokyo. Young chimpanzees learn the different traditions of their group by observing, imitating and practicing, just as young human children do.

Chimpanzees have excellent memories. They can plan for the immediate future—as when they select a tool for use on a termite mound that is some distance away, and out of sight. And researchers in some laboratories, such as Dr. Matsuzawa and his female chimpanzee Ei, have demonstrated that these apes can understand many complex concepts—such as abstract symbols in communication. In America, chimpanzees have been taught 300 or more signs of the sign language used by the deaf. They can put these together in novel combinations—and can even invent signs when necessary.

The plight of our closest relatives in the wild is grim. At the turn of the century chimpanzees roamed over 25 countries in their hundreds of thousands. Today there are 250,000 at most. They are only found in reasonably large numbers in four countries in the central part of their range. They are disappearing because their forest habitat is being destroyed. Clear cut for cultivation, logged by timber merchants from the developed world. In many African countries chimpanzees are shot for meat. And even where they are not, mothers are killed, selectively, so that their babies may be taken. Many of these babies die before they can be sold: they die of wounds or shock. Those that survive the trauma of capture are typically crammed into tiny crates or baskets, their wrists and ankles bound with rope or wire. At the end of a nightmare journey the infant may be delivered to a dealer.

チンパンジーには素晴らしい記憶力があります。少し先のことを考えて行動することもで きます。例えば、離れていて、そこからは見えないところにあるシロアリの塚で使おうとす る釣り道具を、前もって選ぶのです。また松沢(哲郎)先生とチンパンジーのアイなど、研 究施設のチンパンジーの研究では、チンパンジーがコミュニケーションのための抽象的な記 号などを使って複雑な概念を理解できることが報告されています。アメリカでも、聾啞者の 使う手話の300かそれ以上のサインを学習したチンパンジーもいて、このチンパンジーたち はまったく新しい組み合わせを作ったり、必要に応じて新しいサインを発明したりするそう です。

私達のこうした親戚たちの野生における将来は、けっして明るいものではありません。今 世紀の初めには、何十万というチンパンジーが25か国にわたって生息していました。現在で は多く見積もっても25万頭が、生息域の中心部にある4か国に残っているだけです。チンパ ンジーが減ったのは、森林が破壊されているからです。畑の開墾や先進消費国による木材の 伐採が進む一方、アフリカの国々では食肉としてチンパンジーが狩猟の獲物となっているの です。食肉としない地域でも、母親がねらい撃ちにされて赤ん坊が生けどりにされています。 こうした赤ん坊の多くは売られる前に、けがやショックがもとで弱って死んでゆきます。捕 らえられたショックに耐えても、必ずといってよいほど、小さな檻やかごに入れられ、その うえ手足を縄や針金でしばられて輸送されるのです。このような悪夢のような旅の果てに、 赤ん坊は業者にわたりますが、業者の飼育施設は劣悪なことこのうえなく、幼いチンパンジ ーを世話をするのに欠くことのできないもの ―― つまり、人間の赤ん坊と同じく、ミルクと それにもましてやすらぎと愛情 ―― の必要を理解して与える人がめったにいあわせません。 こうしたものが欠けるため、ここでも数多くの赤ん坊が死んでゆきます。ペットとして買い とられてゆくものもいます。しばらくの間は、家の中や庭で自由に過ごせるかもしれません が、この自由は5、6歳になるとおしまいになります。チンパンジーは力が強くて、場合に よっては危険だからです。ふたたび小さな檻に入れられます。ちょうど5歳のソクラテスと いう名のチンパンジーがそうでした。あるいは鎖につながれてしまいます。ウイスキーは2 年以上、たったの60センチしかない鎖につながれたままなのです。こうした元はペットだっ たチンパンジーの中には、ブラザヴィルのグレゴワールのようにアフリカの動物園にひきと られることになるものもいます。また各国を巡業する見せ物業者に売られて、窮屈な衣装を 着せられて、人に笑われ、いうことをきくようにとたたかれるものもいるのです。あるいは、 実験動物として医薬品産業の実験施設に売られてゆくのです。

実験施設にもよりますが、チンパンジーにとっては、まるで強制収容所の囚人が味わう経 験に等しい状態でしょう。ワシントンD.C.にあるアメリカ政府の出資する実験施設では、赤 Conditions in dealer camps are notoriously poor, and there is seldom anyone who understands the needs of a small chimpanzee — they are the same as those of a human infant: milk and, above all, comfort and love. Deprived of these things many more die. Some are bought as pets. For a while they may run free in house and garden. But when they are five or six this freedom usually comes to an end. They are strong and potentially dangerous. They are put in tiny cages — like five year old Socrates. Or chained — Whiskey has been on a two foot chain for over two years. Some of these ex-pets end up in African zoos, like Gregoire in Brazaville. Some are sold to the international entertainment industry, dressed in inappropriate clothes, mocked and beaten into submission. Some are sold to the pharmaceutical or medical laboratories for research.

In some labs the conditions, from the point of view of the chimpanzees, are similar to those experienced by prisoners in concentration camps. In this United States of America government — funded lab in Washington D.C. pairs of infant chimpanzees are stacked in tiny cages, 22 by 22 inches, two feet high, waiting until they are needed for testing hepatitis vaccines.

How sad it is that many scientists who use the living bodies of chimpanzees to try to find out more about human diseases just *because of* their close physiological, biochemical and anatomical similarities to ourselves, have been reluctant to recognize, or at least to admit, that chimpanzees, also like ourselves, are thinking, rational and, above all, feeling beings. It is this blindness that has led to so many abuses — abuses that are shaming to those who commit them. If we must use chimpanzees for learning about human disease, then we must do better than this. And, in fact, there are some labs where conditions are, indeed, much better. Though still not good enough.

For me, visiting these chimpanzees is often like being in a nightmare. Yet I must go -I must see things with my own eyes if I am to help.

The chimpanzees have given me so much over the years: now the time has come when I must try to repay my debt. I must speak out against the cruelties I see — the chimpanzees cannot speak for themselves. And so the Jane Goodall Institute is lobbying for better conditions in labs, organizing workshops and seeking ways to alleviate the boredom of chimpanzees confined in tiny cages. And we are trying to raise funds to build sanctuaries in African countries for at least some of the victims of hunting and poaching, the orphans whose mothers have been shot. And we are trying to raise awareness, increase understanding, worldん坊のチンパンジーが2頭ずつ、積み重ねられた縦・横・高さが50センチ・50センチ・60センチの小さな檻に入れられて、肝炎ワクチンの実験に使われる出番を待っているのです。

チンパンジーが生理学的、生化学的、解剖学的に人間に似ているからというだけの理由で、 その生きた体を人間の病気の研究解明に使っている多くの科学者たちが、それでいてチンパ ンジーがやはり人間と同じように考え、道理をわきまえ、そのうえ感情をもつ生き物だとい うことを納得するのはおろか、考えてみようともしないというのは、なんと悲しいことなの でしょう。この無知蒙昧こそが、チンパンジーの虐待を招いたものにほかなりません。虐待 するものか恥ずかしくなるほどの虐待なのです。かりに人間の病気のことを理解するために チンパンジーをどうしても使わなければならないとしても、今よりもずっとましな方法があ るはずです。そして実際に、まだまだ改善の余地はあるとはいえ、はるかによい環境の研究 施設もあるのです。

私にとって、このようなチンパンジーを見て歩くことは、悪夢を見るようなものです。し かし、私は行かなくてはなりません。少しでも助けになろうとするのであれば、この目で見 なければならないのです。

チンパンジーは、長いあいだ私に、とても多くのものを与えてくれました。今、私はその 借りを返す努力をしなければならない時期にきています。私はこの目で確かめた残酷な扱い に対して発言してゆかなければなりません。チンパンジーは、ものを言えないからです。そ ういうわけで、ジェーン・グドール研究所は実験施設の環境改善を求めて法制化の陳情活動 を行い、研究会を開き、また小さな檻に閉じこめられているチンパンジーたちの退屈を軽減 させられる方策をさぐっています。またアフリカで、狩猟や密猟で捕えられたり、母親を撃 ち殺されて孤児になった赤ん坊の何頭かでもひきとってやれる保護施設を、建設できるよう に資金集めをしています。また世界中で、現状の認識をうながし、理解を増すための努力を 行っているのです。

チンパンジーの行動が一つ理解できると、自然界における私達人間の位置づけが以前より 少しわかってきます。いやでも少しばかり謙虚にさせられる気がしてきます。結局のところ、 人間は単独で繁栄しているのでもないし、私達以外の動物界の生き物たちとの間に、越えら れない深い溝が横たわっているわけでもないのです。チンパンジーは、私達人間に明らかに よく似た特徴をもつことで、人間の想像の中にだけ存在する溝を埋めてくれるのです。一た びこのことが理解されるならば、私達がこの地球上で共存するほかの動物たちに対しても、 新たな尊敬の念が生まれることを、私は希望します。

さて、こういう話をしましても、本当に人間という動物は真実とてもユニークな生き物で あるということは否定のしようがありません。私達は様々な面で、私達のいちばん近い親戚 wide.

An understanding of chimpanzee behavior helps us to understand more about our own place in nature. It is a little humbling. We do not, after all, stand in isolated splendor, separated from the rest of the animal kingdom by a unbridgeable chasm. And in many ways chimpanzees, with their many obvious similarities to ourselves, bridge that supposed gap. And once this has been understood, it is my hope that it will lead to new respect for the other animals with whom we share the planet.

All the same, there is no denying that the human animal actually *is* a very unique being. We are different, in many ways, from our closest relative. For one thing, we have developed a spoken language. This enables us to plan for the distant future, teach our children about things and events not immediately present, and, perhaps most importantly, to discuss ideas, bounce them back and forth so that they take new shape and grow. We have leaped forward, intellectually, until even the brightest chimpanzees are left far behind. People all over the world have developed sets of moral values. And above all—at least, so I believe—we have some measure of control over our own personal destinies. That is, we have the ability, if we use the power of our minds, to overcome to some extent, the dictates of our biological natures.

It is because of our intellect, and because we have been so successful in propagating our species, that we have destroyed, polluted and overpopulated so much of our once beautiful planet.

The stone age men whose remains Louis Leakey excavated and studied had to fight the natural world in order to survive. Lacking lethal claws or teeth, they used their brains to hunt for food, construct weapons and dwellings. They were few, their tools and weapons simple. But as human intellect became ever more sophisticated, so too did our technology. Our prehistoric forebears lived in harmony with nature only because they lacked the tools and weapons and medicines that would have enabled them to conquer their environment more fully, and reproduce themselves more successfully. It is the same with the so-called "primitive" peoples today. It *seems* that modern, civilized man is more greedy for immediate material benefits than were his forebears—but this is only because he has developed the skills and technology to satisfy his needs. And now, suddenly, we, as a species, have begun to understand how our thoughtless, selfish tendencies are destroying the world around us.

We are the only species that COULD have wreaked such monstrous destruc-

と異なっています。例えば、私達には言語というものがあります。言葉をかわすことによっ て、私達は遠い将来のことでも計画することができます。子供たちに、今すぐには目にする ことはできない物や出来事について教えてやることができます。そしてさらに大切なことは、 考えを述べ合い、たがいに意見を出し合ってその考えを新しい形にかえ、発展させてゆくこ とができるのです。知能のうえで私達人類は大きく進歩し、ついにはいちばん頭のよいチン パンジーでさえもけっして追いつけないところまで、ひき離してしまいました。世界中のあ ちこちで、それぞれのヒトの集団の道徳・価値観というものが、つきつめて考えられてきま した。そして、何にもまして私達は自分たちの運命というものに対して、いくらかはコント ロールできるような力をもつようになってきた、少なくとも私はそう信じています。つまり 私達は頭脳の力を使ってある程度は、私達の生物としての素質がもたらす必然を克服する能 力をもっているということなのです。

私達が知能をもっていたから、そして私達が種として非常に成功して子孫を殖やしてきた からこそ、かつて美しかったこの地球がここまで破壊され、汚染され、人口過密になったの です。

ルイス・リーキー先生が、発掘し、研究した石器時代の人々は、自然界で生きながらえる ために戦わなければなりませんでした。鋭い爪も牙もなかった人類の祖先は食べ物を求めて 狩りをし、武器を製作し、住居を建てるために頭脳をつかいました。人間は数も少なく、道 具も武器も単純でした。しかし人間の知能がどんどん複雑化するとともに、技術のほうも複 雑化してゆきました。私達の有史以前の祖先は、環境をもっとうまく克服し、もっと子供を 生み育ててゆくために必要な道具も武器も薬も、持たなかったからこそ、自然と調和して生 きてゆけたのです。同じことが、いわゆる「原始的」な生活を今なお続けている人々につい てもあてはまります。ちょっと見ると現代の文明人は、祖先たちよりも目前の物質的利益に 関して貧欲なように見えますが、これは欲求を満たすために必要な技術と技能を手にいれた だけのことにすぎません。そして今、突然に私達は種としての自覚にめざめ、思慮の足りな い、利己的な性向が自分たちをとりまく世界をどれほど破壊していることかと気づいたとこ ろです。

私達は、環境に対してこのような大規模の破壊をひきおこしえた、唯一の種なのです。大 事なことは、とうとう私達が問題の重大さに気づきはじめたところだとしても、いったい何 ができるのかということです。希望はまだあるのでしょうか。

私は、希望はまだもてると信じます。私はヒトという種に対して、絶大な信頼を寄せてい ます。100年前、普通の人たちの多くは人間が空を飛んだり、月に行ったり、同時に日本とア メリカにいて話をしたり、衛星を使って映像を送ったりする日が将来くるかと尋ねられて、 tion to the environment. The point is, even though we are, at last, becoming aware of the magnitude of the problem, can we do anything about it? Is there hope?

I believe there is hope. I have great faith in our species. One hundred years ago most ordinary people, asked if they thought there would ever be a time when people could fly, or go to the moon, or talk to each other from Japan to America, or send pictures through space, would have believed it impossible. But we have done all those things—and many more. And so today, faced with the impending total destruction of our world, with our backs to the wall, I believe that, provided we cooperate around the globe, we shall somehow find a way to halt at least some of that destruction. The environment can never be as it was — but we can save some of what is left, heal some of the wounds that we have so thoughtlessly inflicted.

People are becoming aware that we humans are not the only thinking, feeling beings. Everywhere people are beginning to show more concern for non-human animals, to realize that they, like us, feel pain and are capable of experiencing happiness or sadness or fear, that they, like us, deserve to be treated with understanding and compassion.

To me, cruelty is the worst of human sins. Once we admit that animals are capable of suffering, physically and mentally, cruelty to them must be viewed in the same way as cruelty to humans. Unless we can instill in our society, particularly our children, a respect for *all* life we cannot hope to progress very far towards fulfilling our human potential. Our children are brutalized and insensitized if they are made to pull the spinal cord from a living frog in biology class: it will be that much easier, subsequently, to harm a dog, a chimpanzee — a human. A more humane ethic—a respect for all living things — is desirable not only for the improved wellbeing of non-human animals, but for our own spiritual development as well. I don't suppose we humans will ever be perfect—but we can surely evolve to a higher moral plane than that on which we flounder today.

The greatest hope for the world — for the environment and for all life — is that more and more people, all around the world, are aware of the problems and want to help, particularly the young people. And what is so important for us all to realize is that each one of us can help. Each one of us can make a difference. I can't tell you what your contribution may be—that is for you to find out in your heart, and act upon in your life.

I want to end with one last story. It is about a chimpanzee in a zoo. His name is Old Man. He spent some years in a biomedical lab and then, when he was no まさかと答えたことでしょう。しかし、私達はそれらすべてをやってのけてしまいました。 もっと多くのことをしています。ですから、今日、地球的な規模の環境破壊を目の前にして、 背水の陣の私達は、世界中の人々が協力することができるならば、なんとかしてその破壊の 波をくい止めることができるでしょう。環境を太古の昔の姿にまで復元することは無理でし ょうが、現在ある自然は救えるのではないか、こんなに無造作に傷つけてしまった地球を、 いくらかはよくしてやることができるのではないかと思います。

考えることができ、感情をもつ生き物は、人間だけではないと気づいた人たちが増えてい ます。どこを見ても、人間以外の動物に対してもっと理解をもって、動物たちが私達と同じ ように痛みを感じ、幸せ、悲しみ、おそれを知ることができると気づきはじめた人たちがい ます。動物であっても、私達と同じように理解と愛情をもって処遇される権利をもつという ことに気づきはじめた人たちがいるのです。

私にとって、虐待は人間の罪の中でも最悪のものです。ひとたび私達が、動物達も肉体的 にも精神的にも苦しみを味わうのだと知るならば、動物虐待は人間に対する虐待と同じ悪と してみなすべきです。私達の社会の中に、とりわけ私達の子供達の中に、すべての生き物に 対する尊重の念をはぐくむことができないかぎり、人類が可能性を十分に発揮して前進を続 けることは望めないと考えます。子供達に生物の授業でカエルの脊髄をひっぱり出すように 指導するとすれば、それは子供達を残忍にし、感覚を麻痺させることにほかなりません。や がて、その分だけ犬をいじめたり、チンパンジーやひいては人間を痛めつけやすくなるとい うことなのです。もっと愛護精神のある倫理、すなわちすべての生き物の命を尊重するよう に指導することが、人間以外の動物の福祉改善のためだけでなく、私達の精神的な発展のた めにも望ましいと思います。人間は完璧にはなりようもありませんが、私達が今日、低迷し ているところよりは、はるかに高い次元の道徳的な在り方を目指してもよいはずです。

地球にとって、つまり環境とすべての生命体にとっての最大の希望は、世界中のより多く の人々がこの問題を認識し、なにか手助けをしたいと思っていることです。特に若い人々が そうです。そして私達すべてにとっていちばん大切なのは、私達一人一人が力になれると認 識することです。一人一人が改革の力となれるのです。この私が皆さんになにをしていただ きたいとか申し上げる立場にいるわけではありません。それは一人一人が自分の胸に聴いて みるよりほかはありません。そして、できることを行動に移すしかないのです。

もうひとつお話をご披露して終わらせていただきます。動物園で飼われていたチンパンジ ーの話です。名前はオールド・マンといいます。医生物学の実験施設で何年か飼育されたの ち、役にたたなくなってから、水にとり囲まれた人工の島に移されました。オールド・マン のほかには3頭の雌がいて、みんな人間に虐待された経験をもっていました。それからもう longer useful there, he was put on a man-made island with water around it. With him were three females. They had all been abused by humans. And the story is also about a young man, Marc, who was employed as a keeper.

"Don't go near those brutes" he was told. "They hate people, they'll kill you!"

So, for a while, Marc paddled his little boat towards the island and threw food to the shore. But as the days went by he became more and more fascinated by the chimps. He watched how they became so joyful as he brought their food, embracing and kissing before they ate any. He saw how gentle Old Man was with the one infant that had been born—his infant. "How can I look after these amazing creatures if I don't have some kind of relationship with them?" he thought.

And so he began going closer and closer. One day Old Man took a banana from his hand. And some time later he actually set foot on the shore. And the day came when, for the first time, he and Old Man made contact with each other— Marc groomed him. They had become friends.

Soon after that, Marc accidentally slipped when he was cleaning the island and fell. The infant was startled and to began to scream. The mother at once leapt to defend her child and bit Marc in the neck as he lay face down. The other two females, as chimpanzee females will, rushed to help their friend. One bit his arm, the other his leg. He thought they would kill him.

And what happened ? Old Man came charging from the far side of the island - to the aid of his one human friend. He pulled each of the females off Marc and hurled them aside. And he stayed there, keeping them away, while Marc managed to drag himself to the boat and safety.

Some months later, when Marc was out of the hospital, he said to me:

"You know. Jane-there is no question but that Old Man saved my life."

This is why, for me, this story is so symbolic. If a chimpanzee — and one who has been abused by people — can reach out across this species gap to help a human friend in his time of need, then surely we, with our greater capacity for compassion and understanding, can reach out to the chimpanzees — and other non-human beings — in THEIR time of need. Can't we?"

一人、登場人物がいます。若い男のマルク、飼育係でした。

「あいつらの近くに寄ってはいけないよ、なにしろ人間を憎んでいるからな。殺されてしまうよ」といわれていました。

それで、しばらくの間、マルクは島のそばまでボートを漕いでゆくと、岸に食べ物を放り 投げて帰っていました。ところが日がたつうちに、だんだんとチンパンジーを見ているのが 楽しくなってきたのです。食べ物を持ってゆくと、4 頭は喜び合い、抱き合ったり、キスを したりするのです。また赤ん坊が生まれました。するとオールド・マンが、自分の子供であ るその赤ん坊に、とてもやさしくするのです。マルクは考えました。「こんなに素晴らしい動 物を前にして、何のかかわりもないような顔をしていては、ちゃんと世話をしてやっている とはいえない」と。

そこでマルクはゆっくりと接近してゆきました。ある日オールド・マンは、マルクの手か らバナナをとるようになりました。それからしばらくすると、ついに島に足を踏み入れるこ とができたのです。やがて、初めてマルクとオールド・マンが接触した日、マルクはオール ド・マンを毛づくろいしたのです。友だちになったのでした。

ところが、ほどなくして、島を掃除していたマルクは、足を滑らせて転んでしまいました。 赤ん坊のチンパンジーが驚いて叫びはじめました。母親はすぐに子供をかばって突進し、マ ルクがうつぶせに倒れているその頸すじにかみつきました。ほかの雌たちも、チンパンジー の雌らしく仲間の助太刀にかけつけました。1頭は腕を、もう1頭は脚にかみつきました。 マルクはもう殺されると思いました。

次になにか起こったでしょう。オールド・マンが島の遠い端からとんできました。人間の 友だちを助けるためにやってきたのです。マルクから雌たちをひきずり離し、脇にはらいの けました。そしてマルクがなんとか自力でボートまでたどり着き、危機を脱するまでオール ド・マンは雌たちを牽制してそこにとどまったのです。

何か月かたって、退院したマルクは私にこういいました。「ジェーンさん、私は思うんです が、オールド・マンは絶対、私の命の恩人ですよ」

この話がどうして私にとって、とても象徴的なのか申しましょう。もしもチンパンジーが、 しかも人間に虐待された覚えのあるチンパンジーが、種の壁を越えて人間の友達の窮地に救 いの手をさしのべることができるのなら、私達が、人類に与えられたより大きな愛とより大 きな理解によって、今度はチンパンジーの、そしてそのほかの動物たちの窮地に救いの手を さしのべることくらいできないはずはないでしょう。

ご静聴ありがとうございました。

稲盛財団1990---第6回京都賞と助成金

発 行 1992年10月31日

発 行 所 財団法人稲盛財団

京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町87番地 〒600 電話〔075〕255-2688

製作(株ウォーク

印刷·製本 大日本印刷株式会社

ISBN4-900663-06-9 C0000